



「佐々木さんを支援する会」会報

ウブムエ

事務局 〒235-0041 横浜市磯子区栗木 1-22-3 / TEL 045-774-9861

洋光台キリスト教会内（蛭川明男牧師）／●世話人会代表 中條 智子

●事務局長 播磨 聡（広島キリスト教会 TEL 082-293-8683）

ニャルワンダ語で「ウブムエ」(ubumwe)とは、「一致」「調和」「和」を意味する。

戦争経験のない私が”自分事”として戦争を考える

一苦しみを分けてもらった経験一

中本 千尋

なかもと ちひろ

南山大学人文学部心理人間学科4年生、PIASS留学から4月に帰国

留学生活最後の日 フィエ出発の朝



高校生の授業をきっかけに、大虐殺後に国民が和解をし、現在はアフリカで治安のいい国と呼ばれるまでに発展を遂げたルワンダに興味を持ち、学生生活を通して和解のテーマについて探求してきた。文献購読や、実際にルワンダに短期間滞在し、いくつかのメモリアルや虐殺現場への訪問を通して、身震いするような光景を映した写真を目にしたり、想像を超えた悲惨な体験談を耳にした。そのような体験から、果たして私が、ルワンダ人の抱える苦痛に共感することはできるのか

と考えるようになった。また、何も知らない、日本からひょっこり来たような自分が、いろいろな人の力を借りて、ジェノサイドやその後の和解について理解を深める価値などあるのか、とも思ったことがあった。ルワンダでの出来事を自分事として捉えられない、もどかしい思いを持ちつつも、だからと言って日本人である自分には関係ないとは言えないという相反する二つの気持ちを持ちながら、ルワンダの和解について調べることを続けていた。その葛藤の中で頂いたのが、PIASSに留学する機会だった。ルワンダで実際に自分も暮らし、紛争地域から集まる学生と学ぶことを通して和解について何とか深く理解したいという思いで留学を決心した。

“自分事で捉えられるようになりたい”と、そんな思いで決断した留学中にも、どこか疎外感やもどかしさを何度も経験した。アフリカの様々な紛争地域からくる留学生の知識と経験の豊富さや、彼らの平和への想いの強さに、尊敬する一方で、日本人の私には何ができるのだろう、と葛藤した。しかし、留学中には、友人が武力紛争の苦

痛を告白する場面に遭遇する経験を通して、武力紛争の苦痛を自分事で考えることができた。そして、それらは留学中の数ある体験の中でとくに心に残っている体験となった。

和解の授業では、今まで冗談を言いあい、笑いあってきた友達が、「自分の叔父を武力紛争で亡くし、和解すべきなんだろうけど、自分には難しい」と涙する姿や、自分の両親を大量虐殺の際に殺され、財産すら親戚にすべて横取りされ自分は貧しい暮らしを送っていると、取り乱しながら語った姿を目の前にした。また寮生活の中で、「紛争で自分は祖国を捨て難民として逃げてきたが、母親と妹をおいてきた。自分是不甲斐ない存在である。またこうやって妹と同じ大学で再会できることはうれしいが、また自分が自分に精一杯になり、妹を傷つけてしまうことがあるかもしれない。だからぜひ、寮の皆には妹に良くしてほしい。」と、寮生の前で涙ながらに打ち明けた友人の姿を見た。その友人の姿に対して、私は、全く支えになるようなことは言えなかったけれど、「はじめて家族と長期間離れて暮らし、不安とさみしさを感じていた私を、あなたをはじめ、寮生全員が家族として温かく迎えてくれた。その恩返しとして、私は、絶対にあなたの妹が困ったときは助ける」と全員の前で約束する経験をした。

この時に、友人として、彼・彼女の一部として、自分が一緒に苦しむ経験をした。この時に、私は友人から苦しみを分けてもらった。そのとき感じた苦痛はまさに自分のもので、大切な友人が今も苦しんでいる姿は、自分も同じようにすごく苦しいという単純なことだった。今まで自分事として、武力紛争の苦痛を感じるができなかった私がこの時、自分の痛みとして感じる事ができたのは、それまでに、人間関係が構築されていたからだと思う。ただの顔見知りではなく、寮生活や、授業での関わりを通して、大切な友人となっていたからこそ、感じた苦痛だったと思う。友人が現在形で苦しんでいる姿を見る経験は、自分にとってもすごく苦しい経験であったが、その経験を通

して自分の痛みとして紛争や暴力を体験することができた。

また、この経験を通して、経験をしたことがない苦しみだから、寄り添うことはできない、理解することはできないことは決してないということ学んだ。同じ人間として、共通の苦しみを持っているということに気が付き、そこに共感することができた。家族を亡くす、などの私が体験したことのない、想像を絶するような相手の苦痛や葛藤のすべてを理解することは決してできないが、「武力紛争の心の傷」や「家族を喪失することの痛み」というなかに、人間が共通して持つ複雑な細かい葛藤や苦しみが見え、そこに共感することができた。この体験を通して、今後、目の前で苦しんでいる人がいた場合に、自分じゃわからない、自分には関係ないと思わず、寄り添っていける気がした。今後、人に寄り添い生きていくことにおいて、大切にしたい姿勢を学んだ。

最後に

—平和のうちに生きる強さとよろこび—

私はこのルワンダ留学中、平和学を学び、平和に生きている人々に出会い、平和が暴力に勝るのだと確信した。その確信は私の希望となった。私たちは皆違う。違いが自分の文脈において理解できないとき、私たちは怖いと感ずることがある。その際に相手を力でねじ伏せる態度をとることや自分たちを守るために相手を自分から切り離し、異質、あるいは危険なものとして排除することには限界があることを知った。恐怖や弱さを超え、相手を受け止めること・理解しようとすることは至難の業である。相手と深く向き合うことで傷つくこともある。しかし、その困難の中でも、人に支えられ、人を支え、平和を築いていこうとする生き方の豊かさやよろこびを知った。自分ももっと日本や世界について勉強し、平和のうちに生きられるような強さを育み、平和を構築する一員でありたいと強く思う。

平和構築を担う若者たちに見る希望

佐々木 和之

ささき かずゆき



みなさまこんにちは。日本はもうかなり気温が下がってきていることと思いますが、いかがお過ごしでしょうか。これから冬に向け、日本も欧州各国のようにコロナ感染拡大の第2波が押し寄せるのではないかと心配しています。ルワンダもコロナ感染拡大予防のための経済社会封鎖のため、多くの人々が困窮していることを前号でお伝えしました。しかし、9月以降、コロナ感染者数が減少したことから、少し明るい兆しが見えて来ました。ルワンダ政府は、10月から教育機関を徐々に再開していく方針を公表し、キガリにあるいくつかの大学がほぼ7ヶ月ぶりにキャンパスでの教育活動を再開しました。プロテスタント人文社会科学大学(PIASS)も、今月中にキャンパスを再開すべく様々な準備を整え、教育省からのゴーサインが出されるのを待っています。

■ オンライン報告会に200名が参加

9月24日、日本とルワンダを繋いでのオンライン報告会は、予想を上回る約200名もの方々にご参加下さいました。初めてのことで不安もありましたが、支援会事務局長補佐の平野健治さん(平塚バプテスト教会牧師)が日本側で万全の準備をして下さり、大きなハプニングが起きることもなく、良い報告会になったことを感謝していま

す。今回の報告会のテーマは、「平和構築を担う若者たちに見る希望」でした。私は、PIASSで教育活動を始めた2011年以来、一貫して「次代の平和構築を担う若者たちを育て繋ぐ」ことを目標にしてきましたが、参加者の皆さまに、その活動の成果を若者たちから直接聞き取っていただけたらと思い、報告会のプログラムを準備しました。

PIASSで平和学を学んだ後、持続可能な平和と開発のための研究・行動センター(以下、平和と開発センター)の職員として働くセルジ・ムブニさんとフロリアン・ニュンゲコさん、そして、PIASSの日本人留学生第一号で、大学卒業後はNHKのディレクターとして活躍されている加藤麗さんの3名が録画映像で出演し、今、具体的な平和のための働きにどのような思いで取り組み、今後どのようなことを目指しているのかを語って下さいました。

報告会ではまた、女性協働グループ、ウムチョ・ニャンザで和解と共生の歩みを続ける、虐殺生存被害者のフランソワーズさんと加害者の夫を持つリベラタさんに焦点をあてた短編映画、『和解への道』を放映しました。この作品は、二人の女性からの聴き取りをもとに、PIASSの学生であるダーシー・ムヒロさんが中心になり制作したものです。ダーシーさんは、平和と開発センターの活動を通して2人の女性たちと出会いました。そして、悲惨な過去と困難に満ちた現在にも関わらず、共に癒しと和解・共生の道を歩み続ける彼女たちから、「あなたは平和のために何をするのか」と問われたのでした。彼は報告会の中で、「映画製作を通してこのような心揺さぶる物語を人々と分かち合っていくこと。それが世界の平和のために僕ができることだ」と語っていました。

彼がメディアを通して平和のメッセージを発

する方法を最初に学んだのは、ドイツ人平和活動家を招いて実施した平和ジャーナリズムのワークショップでした。そして彼は、ウムチョ・ニャンザの女性たちと出会い、彼女たちが指し示している希望を多くの人たちにも分かち合いたいとの思いからこの映画を作ったのです。

私はこれまで、二つのことをモットーにして大学教育に取り組んできました。その第一は、平和構築の理論や枠組みだけでなく、具体的に平和を創るための実践について学ぶこと。第二は、大学の教室と草の根を繋ぎ、現場から学ぶことです。私は、この映画をダーシーさんが自主的に製作したことの中に、これまでの教育活動の成果を見出し、とても嬉しく思っています。

今の世界各地の状況は、愛よりも憎しみ、平和よりも戦争、希望よりも絶望が支配しているかのようです。自分の残された生涯のうちに、この地上から差別、抑圧、殺戮が無くなり、全ての人々が神様から与えられている可能性を十分に発揮することができる、本当に平和な世界が実現すると想像することは困難です。平和を創るといってつもなく大きな課題に比べて、私たち一人一人の力は何と小さいことでしょうか。それでは、私たちは絶望するしかないのでしょうか？私はそうは思いません。なぜなら、私たちは平和実現の希望を若い世代に託すことができるからです。しかし、そのためには、私たちが具体的な行動を通し、日々誠実に平和を追い求めることが必要なのです。報告会で発題してくれた若者たちの話を聞きながら、私はこのような思いを新たにしました。

■ 活動短信

● 前号でルガンダ村の養豚組合が、収益金で1500坪の農地を購入したことをご報告しましたが、その土地の有効利用が始まりました。8月7日、養豚組合のメンバー3名とともに、車で約1時間のところにある、マハマ村の環境保全型農業を実践する2つの農家を訪ねました。これらの農家は、私が昨年、ルワンダ

における環境保全型農業について調査活動をしていた時に知り合った方々で、彼らの優れた営農をキレへの人たちにもぜひ紹介したいと思っていたのでした。今回、ルガンダ養豚組合が購入した土地で食用バナナの栽培を始めることになったため、彼らに環境保全型農業によるバナナ栽培について学んでもらうことにしたのです。そして、8月24-25日には、マハマ村で環境保全型農業の普及に努めているNGO職員をルガンダ村にお招きし、養豚組合のメンバー全員を対象に研修会を実施することができました。私は参加できませんでしたが、現地協力者のオーガスティン・ハビマナ牧師（元REACH職員）が研修会実施のための調整作業にあたってくださいました。そして、ルガンダ村養豚組合は、雨期が始まった9月中旬、購入した土地一面にバナナの苗を植え付け、苗と苗の間には土壌を侵食から守り、豚の飼料にもなる緑肥作物を植え付けました。近いうちにキレへ訪問を計画していますが、緑肥作物に覆われたバナナ畑が見られるのを楽しみにしています。



環境保全型農業に取り組む農家を訪問

● 8月30日と9月18-20日の2回、ウムチョ・ニャンザで働く女性たちの子どもたちを対象にした平和構築トレーニングを実施しました。第1回目は、過去2年に渡って継続してきたジェノサイドや平和に関する学び、日常生活での諍いごとにどのように対処していくべき

かについてのトレーニング、そして、平和と和解のメッセージを発信するための演劇づくりを振り返り、それらによっておのおのがどのように変わったのかについて分かち合うとともに、今後の活動について話し合いました。第2回目は、子どもたちの要望に応え、「暴力に代わる手立て」ワークショップの初級コースを実施しました。

- 最後にとっても嬉しいお知らせです。ウムチョ・ニャンザの女性たちが作った布製品やブックカバーのオンラインショップでの販売が今号の発行と同時に始まります！そのためにご尽

力くださった、元PIASS留学生の桂川睦美さんと支援会事務局の蛭川明男さん（洋光台キリスト教会牧師）に感謝いたします。詳細は同封させていただいたご案内をご覧ください。販売させていただく製品の多くは、PIASSでの学びを終えて8月と9月に帰国した3名の日本人留学生たちが既に日本に持ち帰ってくださっています。女性たちがコロナ禍による苦境を乗り越えていくためにも、このオンライン販売を成功させることが必要です。ご自身で製品をご注文下さるとともに、お知り合いやご友人にぜひともご紹介ください。

今年度 PIASS から日本への留学生の紹介

佐々木和之

PIASSが今年度、学術交流協定を結んでいる東京外国語大学に送り出す3名の学生たちをご紹介いたします。コロナ禍のためにビザの取得が遅れていますが、11月以降には日本に渡航できるのではないかと期待しています。

約10ヶ月間の交換留学プログラムに参加する一人、**ファブリスさん**はブルンジ出身ですが、2015年の政治危機の折に家族と一緒に国境を越えて難民となり、ルワンダ南東部の難民キャンプで生活しながら高校に通いました。ルワンダに来るまではフランス語で教育を受けましたが、高校3年間、慣れない英語を猛勉強して優秀な成績で卒業し、平和紛争学科に奨学生として入学しました。大学入学後は、ルワンダで難民として暮らす中高生の奨学金申請を支援する活動に取り組み、大学卒業後も、難民の子どもたち・若者たちがより良い教育を受けられるように働きたいと語っています。

交換留学生の二人目は、ウガンダからの留学生の**テンボさん**です。NGOの平和構築プロジェクトで若者への教育活動等に従事した経験にもとづき、平和構築を専門的に学びたいとの熱意を持って平和紛争学科に奨学生として入学しました。ユーモアのセンスがあるため、学生たちのムードメーカー的存在で、昨年からはPIASS留学生協会の代表を務めています。

三人目はイシチャーツェ・エリ・**ロドリグさん**です。ブルンジ出身のロドリグさんは、一昨年、交換留学生として東京外語大で学びましたので、ご存じの方もおられることでしょう。PIASS平和紛争学科の学士課程を優秀な成績で修了した彼は、今後2年間、国費留学生として東京外語大「平和構築・紛争予防修士プログラム」で学びます。今週ようやくビザを取得できましたので、11月の渡航を心待ちにしています。

(以下、学生たちの文章の翻訳：佐々木和之)

(1) 「東京外大のオンライン授業に参加」

PIASS ブルンジ人留学生

アンリ・ファブリス・ンダイゼイエ

屋外で課題に取り組むことも



皆さまにルワンダからご挨拶申し上げます。コロナ禍のためにビザ発給が遅れているため、私はまだルワンダに留まっています。しかし、近い将来、日本に到着し、皆さまとお会いできると信じています。コロナ禍のために3月下旬からPIASSが閉鎖されていますが、この間、オンラインで授業を受けてきました。そして、10月1日から東京外国語大学のオンライン授業が始まりました！

東京外国語大学のコースには、社会的、経済的、政治的変革、そして、平和構築に関する私の理解を深めてくれる授業が数多くあります。まだ2週目に入ったばかりですが、「難民の国際的保護」、「国際連合の理論と実践」、「国連組織と持続可能な開発目標」、「平和構築の理論と実践」、そして日本語初級集中コースを受講しています。

ルワンダと日本には7時間の時差があるため、ほとんどの授業はルワンダ時間の午前1時半以降にあり、昼と夜がひっくり返ったようになっています。日本語の授業は毎日ありますが、既にひらがなが読めるようになりました。アルファベットのフリガナを付けると、母語であるキルンディ語（ブルンジの公用語）と同じように読めるので助かっています。今は書き方を特訓しています。

日本では多国籍な人々とのネットワークと繋がりが、その多様性から多大な恩恵を受けることができるかと期待しています。若者、壮年、年配の方々など、様々な年齢層の人々と交流する機会を積極的に作りたいです。そのことは、とても嬉しいことであると同時に、私のコミュニケーションの能力を養ってくれることでしょう。

最後にぜひ皆さまにお伝えしたいことがあります。それは、今やPIASSの平和紛争学科にはアフリカ各地から若者たちが集い、ピースクラブの活動を始め、皆さまがご支援くださっている様々な活動は、ルワンダの国境を越えて広がっているということです。皆さまが続けておられる、新しい世代のピースビルダーを生み出す努力に心から感謝申し上げます。

(2) 「日本でお会いできるように願っています」

PIASS ウガンダ人留学生

テンボ・ジュスタス



「暴力に代わる手立て」トレーニングに参加
(筆者は右から2人目)

皆さまこんにちは。私は、ウガンダ出身でPIASS 平和紛争学科2年生のテンボ・ジュスタスです。皆さまの中には、私とファブリスの留学資金のためのクラウドファンディングにご協力下さった方もおられることでしょう。皆さまのご支援に心より感謝申し上げます。日本の皆さまもコロナ禍による試練の中にあることでしょう。皆様に心よりお見舞い申し上げます。

ルワンダもコロナ禍の影響で、多くの人々が困難を強いられています。日本政府からのビザ発給が止まっているため、9月末に日本に行くことができませんでした。しかし、近い将来、日本での留学生生活を始め、皆さまにお会いできるようにと願っています。

10月から東京外国語大のオンライン授業が始まりました。今学期は、「国際連合の理論と実践」、「平和構築の理論と実践」、「近代日本の国際関係」「戦後日本の外交」「難民の国際的保護」、「グローバル化と社会変革」、日本語初級集中コース等を受講しますが、経験豊富な講師から興味深い授業が受けられることに興奮しています。以前はレポートやエッセイを書くのが苦手でしたが、ほとんどの科目で授業のたびにレポートを要求されるので、レポート執筆に大分慣れてきました。さらに、授業でのディスカッションでいつもアフリカの状況について質問されるので、よりよく答えられるように努める中で、リサ

ーチやプレゼンのスキルが向上したように感じています。

様々な課題にも直面しています。ルワンダは日本よりも7時間遅れているので、深夜から早朝までの時間に授業を受けなければならず大変です。また、夜間に停電になったり、インターネットの接続に問題が起き、授業の参加に支障をきたすことがあります。さらには、東京外国語大のオンライン・プラットフォームにまだ慣れていないので、コースの登録、課題の提出、必読図書を含め、授業に必要な情報取得に戸惑うことがまだあります。

最後になりましたが、私とファブリスの留学実現のためにご支援くださりありがとうございます。皆さまのお働きが神様に豊かに祝福され、これからも多くの国々の若者たちが恩恵を受けることができるようにと願っています。それでは、日本でのお会いできるまで、どうか皆さまが安全に過ごされますようにお祈りいたします。

(3) 「日本に戻れるのを心待ちにしています」

PIASS 平和紛争学士課程修了、東京外国語大学平和構築・紛争予防修士課程1年

エリ・ロドリグ・イチシャーツェ



ブルンジで青少年平和構築トレーニングを実施

アマホロ！ 「佐々木さんを支援する会」の皆さま、こんにちは。

この度、再び皆さまにご挨拶できること、そして、今後2年間に皆さまとお会いする機会が与えられるであろうことをとても嬉しく思います。と言いますのは、この秋から国費留学生として東京外国語大学の平和構築・紛争予防修士プログラムで学べることになったからです。

コロナ禍のために日本政府がビザの発給を停止していたため、これまでルワンダで待機してきましたが、つい2日前にようやくビザを取得することができました！ 10月1日には修士課程の最初のコースがオンラインで始まりました。

日本で平和構築の理論と実践についてしっかり学び、修士号を取得することがまず第一の目標ですが、平和構築といっても幅広いですので、修

士課程修了後の仕事を見据え、自分の専門分野を明確したいと願っています。現時点での将来の目標は、紛争のために心に傷を負いながら、仕事もないために困難な状況にある祖国ブルンジの若者たちが、身体的、精神的、社会的により良い人生を実現できるよう、具体的なプロジェクトを立ち上げていくことです。

最後に、「本当にありがとうございます」と申し上げます。皆さまのご支援により私は PIASS の平和紛争学科で奨学生として学び、そのうちの

1 年間は交換留学生として東京外国語大学で学びました。私は子どものころからクエーカー教会（注：絶対平和主義で知られるキリスト教の教派）の中で成長しましたが、PIASS での学びと、沖縄と広島での平和学習が、私の平和理解を形成する上で決定的なものとなりました。私は将来、ブルンジでピースビルダーとして働こうと思っているわけですが、それは皆さまのご支援の賜物なのです！

事務局からのお知らせ

- 9月24日、佐々木和之さんのオンライン報告会には、多くの方がご覧いただき、ありがとうございました。今でも報告会を視聴できます。「佐々木さんを支援する会」

ホームページに、次の二つのリンクを貼っています。ぜひ、ご覧ください。

YouTube オンライン報告会→ <https://youtu.be/wdhXxSLNM9M>

公式 YouTube チャンネル→ www.youtube.com/channel/UCVW_y9u6W00g_jLSyYTYPlYQ

- 毎号のお願いで恐縮ですが、支援会の財政がひっ迫しています。16年に及ぶ皆様のご支援を感謝しつつ、ぜひ、支援会へのご入会、また一時的な支援金など、これまでと変わらぬ祈りとご協力をお願い致します。
- 「ピースビルダー育成プロジェクト」（目標100万円）のお願いも継続しています。平和構築を担う若者たちを育てるために、ご協力をお願いいたします。振替用紙に「育成支援」と明記してお送りください。

● 「ウムチョ・ニャンザ」の製作品のご購入をお願いします！

毎年、佐々木さんの帰国時に、ウムチョ・ニャンザの方々が製作したブックカバーやバックなどを販売し、製作者の貴重な現金収入になってきました。しかし、今年は各地で販売ができません。そこで、オンラインショップ「ウムチョ・ニャンザストア」を始めました。ぜひ皆様にお買い求めいただき、女性たちの活動を応援してください。ご案内を同封しています。よろしく願いいたします。 QRコード →



- 事務作業を簡素化するため、すべての支援者に一律に「振替用紙」を同封させていただいています。

● 郵便振替口座 00250-0-112907 佐々木さんを支援する会 ●

- 佐々木さんを支援する会HP（ホームページ）

<http://rwanda-wakai.net/>

佐々木さんの活動報告、写真館、等。HPから入会手続きも可能です。佐々木和之さん、恵さんのブログも適時更新しています。

- 世話人会 中條智子（長住教会牧師）、加藤 誠（大井教会牧師）、播磨 聡（広島教会牧師）、蛭川明男（洋光台教会牧師）、米本裕見子（日本バプテスト女性連合幹事）